
ひとり。

Akira*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとり。

【Zコード】

N71330

【作者名】

Akira*

【あらすじ】

「一人にして。」

彼女は口癖のようにこの言葉を繰り返す。

クラスメイトはギャルで言動が理解不能。

同級生には「あの子誰?」とまで言われてしまつ程地味な彼女。

彼女　　藤崎亜夜奈は、全てに疲れ、毎日のように屋上に入り浸っていた。

ある日、そんな彼女に“不思議”が訪れる。

いつものように屋上のドアを開けると、通常ではありえない光景が

広がっていた。

そしてここから、彼女の“不思議な御伽噺”が幕を開ける・・・。

プロローグ「あ おーとー（シヨウジヨ）」

ギイツ・・・
また、扉が開かれた。
おずおずとラインを越える“少女”。
それを冷ややかに眺める。

・・・嗚呼、始まるよ。

旋律が音を奏でる、抗えない悲劇の物語ストーリーが。

クスツ・・・クスクスクスツ・・・

さあ、準備は良いかい？

“少女”が何をしようが、“少女”の身に何が起こるが、誰にも
この事を話してはいけないよ。

何故なら、この事は誰にも秘密だつたんだから。

僕は彼女の人生をずっと観て來たよ。

彼女の笑う姿も、怯える姿も、苦しむ姿も、死ぬ姿も、見飽きるく
らい、全部。

・・・でも残念な話だよね。

今日は何だかハッピーエンドらしいんだ。
つまんないな、つまんないな。

僕は毎回彼女の苦しむ姿を見るの、とっても楽しみにしていたのに。
おかしいな、おかしいな。

さあ、準備は良いかい？

クスクスッ・・・

もうすぐ始まってしまうよ。
もしかしたら僕の大好きな悲劇・惨劇かもしれないよ。
帰るなら今がチャンスだよ？

彼女は今回どうなるんだろうね？
楽しみだね、楽しみだね！

殺すのかなあ？殺されちゃうのかなあ？
彼らに逢うのかなあ？逢わなくて済んじゃうのかなあ？
それとも・・・

シンジツ一タドリツイチャウノカナア・・・？

Words by spectator.

第一話「an imitation (一セモノ)」

第一話「an imitation (一セモノ)」

私は虚空を見つめていた。

今まで悩みなど無かつた。

ただ一つあつた事と言えば・・・人付き合い・・・かな。

私には“親友”と言える人は一人もなく、“友達”と言える人もいるのかどうなのが分からない位。

“友達”なんて偽物だと思つてたし、第一“友達”と言つ物も分からなかつた。

物心ついた時には女子の中で複数の集まりが出来ていて、私は楽に付き合える男子とばかり一緒にいた。

つまり、私は生まれきつての一匹狼だという事だ。

バーンッ！

「！？」

「あつちい～？またアンタココにいたの？？ウチメツチャ探した
んだけどお～！」

「ああ、『ごめん翔耶。』^{かや}」

「何かあ、皆が集まれつて言つて来てえ・・・えつとあ・・・何だ
つけえ？」

「もういいよ、分かつたから。もう少ししたら行くつて言つといて。

「ラジヤ～ツ！」

パタパタと走つて行つた安藤翔耶の背中を見て、私は溜め息をついた。

ちなみに“あつちい”と言つのは私に付けられたあだ名。

本名は藤崎亞夜奈。

翔耶に比べれば割と普通な名前なのかもしれない。

翔耶は物覚えが悪い。

それなのに彼女は最近私への伝言係となつていた。

休み時間になると毎回屋上に行く私に話しかけられない人達は、人懐っこい性格の翔耶に伝言を頼む。

とは言つても彼女は先程の通り物覚えが悪いので、無論、ほとんど伝わつていなかつた。

人からの伝言は3歩歩けば忘れてしまうと言つて良い程悪い。

本当にあの子は天然の鶏だ、と思つてしまつ事が多々ある。

でも思つてゐる人は私以外誰もいない。と、思つ。

そんな事を思つてゐる間に、また翔耶が息を切らしながらやつて來た。

今度はちよつと怒つてゐるようだ。

「ちよつと、あつちいー！いい加減にしてよーー！早く来てねつて言つたでしょおつ！？」

「え。」

彼女の言葉に圧倒されてしまつた。

そんな事さつき一言も言つてなかつたじやないか。

大体アンタが鶏だからそつなるんだ

思考回路で悪口

がぐるぐる回る。

「ま旣行くよ、あつちいっ！皆が待つてゐるっ！ー！」

「ちよつと、そんなに引っ張らないでよ！袖が伸びる……！」
「早く来ないあつちいが悪い……！」

「はい？」

やつぱり、嫌い。

“皆”っていう言葉が、嫌い。

私は一匹狼なんだ、“皆”と一緒にいる権利は無いんだ。と、心の中の私が叫んでいた。

すかすかと廊下を早歩きで歩く翔耶の後ろを、私はただ袖を引っ張られながら歩く。

私は地味だから、田立つ翔耶の後ろにいると不思議な田を向けられる。

「あの子誰？」と叫びて叫ぶ声が聞こえた。

“逃げ出したい”

そう思つた。

その瞬間、私の手は翔耶の手を振り払い、足は屋上に向かつていた。

「ちよつ、ちよつと！？あつちい！？どこ行くのあ～つー？」

困惑した翔耶の声が聞こえる。

そんなんはお構いなし、私はただ、この場所が好きなだけ

バンッ！

「…………え？」

私の視界には見た事も無い世界が広がっていた。

* 第一話に続く*

第一話「a wonder (ワシギ)」

第一話「a wonder (ワシギ)」

昼のはずなのに、何故か目の前の景色は夜。
月が青い、木々が鬱蒼としている深い森。

“不思議”

初めてこの場所を見つけた者は誰もが口を揃えて言つはずだ。
周りを見回すと、向こうの方に一人、純白の髪に蒼い瞳をした少年
が立つていた。

人形のような顔をしたその少年は、私に目を向け、自己紹介する。

『僕の名前はライア。よろしく。』

「よ・・・よろしく・・・。」

ライアは私が今来た方向を指さして言い放つた。

『君はあつちが嫌いなんだろ? 人も、世界も、何もかもが。』

一瞬にして心臓を撃ち抜かれた気分になつた。

私の感情は表に出さないでいたのに、初めて会つた彼には全て分か
つていたのだから。

図星だつたのは悔しかつたはずなのに嬉しくて、私は思わず、

「・・・・・うん。」

と頷いてしまつた。

すると彼は、蒼い瞳が隠れてしまつ程田を細めて笑う。
あ・・・この感じ何処かで・・・。
考えているうちに彼がまた話しだす。

『・・・僕もそつ思つてた。だからこの世界に来たんだ。』

「あなたは・・・昔あつちの世界にいたの?』

『うん。ついこの間まで。』

『ついこの間?』

『そうだよ。僕は君が毎日屋上に来るのを知つていた。・・・何の為に来ているのか、もね。』

「・・・!』

『大丈夫。心配しなくても良いよ。僕も君と同じ、一匹狼だつたんだから。』

「わ・・・たし、は・・・。』

『知つているよ。亜夜奈ちゃん、でしょ?』

「な、何でつ・・・!?』

『僕はずつと見ていたんだ。君が初めて屋上に来た時から

』

一年前

君が毎日のように屋上に来始めたのは、確か君が一年生の時の夏休み前だつたかな。

何か思い詰めた表情をしていたのを覚えてる。

その後すぐに、言葉遣いの悪い女の子が寄つて来て、君を引っ張つた。

その時その子は君の事を“亜夜奈ちゃん”つて呼んだんだ。
でもやっぱり君はその子の手を振り払つた。
そして、「一人にして」と。

僕は暇だつたから、慰めのつもりで君にすり寄つた。
・・・もつ思い出したかな？

そう、僕はあの時の白猫だよ。

『思い出してくれた？』

「つ。」

言葉が、出なかつた。

いや、むしろ出す事が出来なかつた。

同時に、「何で関係の無いあなたが私の話に首を突っ込むの？」、
といつ気持ちがこみ上げてきた。

ドウシテワタシニハナシカケテイルノ？

『無理しなくても良いよ。だつて君はもうこの場所の住人になる事
が出来たんだから。』

「住人・・・？」

『そうだよ。この場所はあつちの世界が嫌になつた人の為に創られ
た世界なんだ。』

「私は別に・・・。」

『じゃあ君は、あつちの世界でずっと一緒にいられる自信はあつた？
はあつた？』

「！」

『逆に、あつちの子達とずっと一緒にいられる自信はあつた？』

ライアの眼は鋭い眼光を放つ。

まるで、全てを見透かしているよ。にづつ。

それでも私は、彼が言いたいこと全てを跳ね返す様に言った。

「無いよ。でも、この場所でもずっと一人ぼっちな気がしてならない。」

彼が眼を見開く。

予想外の解答こたえだったようだ。

でも私の想像していた通り、彼は法まことにこう言った。

『大丈夫。僕がずっと君の傍にいてあげるから。』

・・・嘘だ。

嘘に決まっている。

何をどう言い換えたつて嘘は嘘、嘘には変わりない。

また本当の私が叫ぶ。

「・・・帰りたい。」

呟いた声が彼に聞こえてしまった。

その途端、彼の形相が変わった。

さつきの優しい面影などは全く無い、怒りの顔。

そして、彼は私に酷く残酷なことを言ったのだった。

『君は元の世界には戻れない。だから、僕は君をここに閉じ込めることにするよ。』

遠くで、何かが碎け散る音がした

。

* 第二話に続く*

第三話「a mane (メイロ)」

第三話「a mane (メイロ)」

『君をここに閉じ込めることにするよ。

』

「…………」

あの後…………どうなったんだつけ…………？

何かが碎け散る音が微かに聞こえた瞬間に私の目の前は真っ暗になつて…………。

そうだ、ライアの笑顔が。

歪んでいたんだつた。

今私は、ただ暗闇の中にいる。
でも、さつきまで何も無いように見えたこの場所も、所々触つてみると、

「ン・・・ッ

「・・・壁だ・・・。」

今まで気がつかなかつた。
よく見るとその壁は色々な形の赤いピースによつて創られている。
もつと念入りに調べよつと身を屈めていると、後ろから声をかけられた。

『もしもし、もしもしーし。』

「ー?」

『やつとお氣づきになられた・・・。』

「ウサギ・・・、タキシード・・・？」

『まさにその通りで御座います。ところでお嬢さん、ワインは如何ですかな?』

「ちょ、ちょっと待つて。先に私の話を聞いてくれない?」

『はて? 何で御座いましょう?』

『ここって一体どこの? ここから脱出する方法はあるの?』

『勿論御座います。ですが・・・。』

「何よ。」

タキシード姿のウサギは躊躇いながら私の質問に答える。
やつこえざさつきから田が泳いでいる気がする。

『・・・私共はそれを伝えてはいけない』とこなつて居つまじて。』

「・・・はあ。」

『あ、ああ、でも、一つだけお教える事が出来る』ことが御座います。』

「何?」

『実はこの場所は迷路になつて居つまして、私共が提供致します項目に一致しますと此処から脱出することが出来る様になつて居ります。』

「・・・その項目って何ですか?』

『はい。では只今から私がお嬢さんに質問をさせて頂きます。それに正直に答えて下さいませ。』

『分かりました。』

『では一つ。』

『どうぞ。』

ウサギは蝶ネクタイと襟元を正す。
そして咳払い。

・・・早くしてくれると嬉しいんだけど。

『・・・貴女がこの世界にやつて来たのは何時で御座いますか?』

「今日のお毎頃です。」

『初めて貴女が田にした風景は?』

「深い森です。なぜか夜になつていて、月は青でした。」

『その後誰かに逢いましたか?』

「はい。純白の髪に綺麗な蒼い田をした少年に逢いました。」

『彼の名前は?』

「ライア。」

『!-!-』

ライアの名前を口にした瞬間、ウサギが少しの間動かなくなつた。
彼は何かに関わっている存在なのだろうか。

「・・・どうかしました?」

『い・・・いや・・・。』

「ねえ、ウサギさん。」

『何でしよう?』

「ライアってこの世界では何者なの?」

『お嬢さん、それは聞いてはいけないことがあります。』

『どうして?』

『・・・お嬢さんは、彼に何か唆されてしまふのが嫌な気がしますよね?』

丁寧な言葉遣いだったウサギが、急に口調を変えた。
今までとは違つて攻撃的な田をしている。

「されてないよ勿論。当たり前でしょ?」

『お嬢さん、』

『ん?』

『合格で御座います。』

『合格・・・つて？？』

『・・・簡単に言いますと、お嬢さんはこの迷路を抜ける権利を得た、ということで御座います。』

『そう・・・ですか。』

『ああそうだ、お嬢さん。』

『何ですか？』

『ぐれぐれも“彼”的幻想には気をつけて下さませ。』
「それつてどうい・・・！？」

バリーン！
パラパラパラ・・・

ウサギが言い終わつた刹那、赤いピースが一瞬にして散らばつた。
そして、迷路にやつて来る前の森に戻つていく。

「・・・ウサギさん？」

ついさつきまで話していたウサギは赤いピース達と共に消えてしまつていた。

残されたのは、私一人。

また一人ぼっちになつた私の上空には、さつきと変わらず青い月が輝いていた。

第四話「 an . i l l u s i o n (ゲンソウ) 」

第四話「 an . i l l u s i o n (ゲンソウ) 」

一人ぼっちの空の下。

クスッ、クスクスクス・・・

森の奥から聞こえてくる微かな笑い声。
それと同時に流れている何かの音楽。

「誰だろ?・・・。」

森の道でへたれ込んでいた私は、急に聞こえてきたその声と音楽に耳を傾けていた。

音楽のある方向に歩みを進めてみよ?と思ひ、立ち上がる。
ふと、音楽が止まつた。

『クスクスクス・・・貴女は此処に迷い込んだの?』

透き通るような声。
私を誘う。

「はい。」

『貴女は今お暇かしり?』

「・・・はい。」

『では俺達と一緒に

「-。」

『踊りませんか?』

「ラ・・・・イア・・・・・！」
『・・・・久し振り。』

視界に飛び込んできたのは、純白の髪と蒼い瞳の少年ライアだった。

私を迷路に閉じ込めた相手。

ずっと脱出口を聞き出す為に探しっていた相手。

そして憎しみをも抱き始めた相手。

その隣に立っているのはさつき私に話しかけた瑠璃色の髪と碧い目をした美しい少女と、緑の黒髪に紅い目をした背の高い少年。少女の方は睫毛が長く、シフォンのドレスを着ていて、少年の方は光の反射で虹色に見える服を着ている。

彼らは私がライアの名前を知っていたことが不思議なのか、小首を傾げている。

『お知り合いなの？』

『そうだよ、彼女は亜夜奈ちゃんっていうんだ。』

『ふーん・・・・。』

『・・・・・・。』

よほど私の事が気になるのか、ライアが話している間も私の事をまじまじと見ている。

碧い目と紅い目から放たれる鋭い視線。

最初に出逢った頃のライアとそっくりで、思わず私の顔は強張る。

『あ、そうだ亜夜奈ちゃん、この女の子はクリア、男の子はシュヴェーアトつて、いつて僕の知り合・・』

『ちょっと、私はれつきとした貴方の“お友達”でしょ！』

『ライア、お前はちょっと“友人”に対する扱いが酷過ぎじゃね

え
か?
』

ドクンツ

あ
れ
・
・
・
?

私の胸の鼓動が高鳴る。

訴えが聞こえる。

「逃げなれば」と悟る。

ドクンツ

再度私の心臓の音が聞こえたかと思うと、私は知らぬ間に、

狂つたように叫んでいた。

たのを、私は一生忘れる」とはないだろ？。

『クスクスクス・・・わあわあ、早く踊りましょう! うわあればきっと忘れることが出来る箇所』

シフォンのドレスを艶やかに広げて誘うクリア。まるで蝶のよみうりドレスが舞う。

『そりだよ里夜奈ちゃん、早く踊らつぜ。』

ショヴェーアトも誘う。

服が今までよりも更に強くなつた月の光で眩しそうに綺麗な虹色に光る。

「…………つ。」

意識が朦朧として来た。

彼らの顔が歪む。

彼らは私の手を掴む。

振り払う事も出来ぬまま、真つ赤なキノコの傘の下で踊りが始まる。

ワルツ。

ライアは跪いて私を誘う。

ああ・・・、わいつきの曲と笑い声が聞こえる・・・。

そう思つた直後、

『貴女は此処に来なければ良かつたのよ。クスクスクスッ・・・。』

不意にシュヴェーアトに取り押さえられて身動きが取れなくなる。そしてクリアはそんな台詞と共にナイフを私に向けて降り下ろ

そこど私の夢は途切れた。

第五話「a question (シシモン)」

第五話「a question (シシモン)」

再度目覚めたときは、私はミルク色の霧の中にいた。あの恐ろしかったクリア、シュヴューアト、ライアの姿はもう何処にもない。

「うわっ、冷たい……っ！」

今気付いたが、私の爪先が氷のように冷たくなっていた。ふと、背後に気配。しかし霧のせいで姿がよく見えない。

「誰？」

『……こんなに、夜奈ちゃん。』

「ライア……!?」

『……どうかした?』

「だ、だつてさつき……。」

『ああ、さつきのことか。』

「そんな簡単に……」

『ちなみに言つておくが、それまでのことは君が目覚めた時には全て消えてるよ。』

「……え？」

『だからつまりは、今君が再度目覚めた時点でも君と僕以外の人々の記憶と起きたことは消えたんだよ。』

「クリアさんのもシユヴューアトさんのも……?』

『やう。今この世界は君を中心回つて回ると言つても良いんだよ。』

・・・えーと。

私が目覚めると今までの「」が全て無かつたことになつ、この世界は私を中心に回つてゐる・・・?
訳が分からぬ。

でもいいや。

とにかく私が一番最初に知りたいのは。

「ねえ、ライア。」

『何?』

「」の世界からどうやつたら出る「」が出来るか知つてゐる?」

ライアはまたかといつぱりふつと笑つて見せる。

『知つてるよ、当たり前でしょ。』

「じゃあ・・・」と言いかけて止める。

今彼に「教えて」と言つてもその通りに教えてくれる訳が無い。
何たつて私を迷路に閉じ込めた人なんだから。

「そう・・・。じゃあもう一つ。」

『ん?』

「何であなたはわざわざ私を迷路に閉じ込めたの?」

『・・・・・・・』

目を見開いたまま答えてくれないライア。

珍しく目が泳いで戸惑いの表情を隠せずにいる。
もしかして理由自体が無いの?
まさか。

「ど、どつかしたの？」

『え、い、いや・・・何でも、な、い。』

「本当？」

『う、うん。本当。』

「じゃあ最後に一つ。」

『何か質問が厳しくなってきたな・・・。』

そう小さな声で愚痴をこぼすライア。

本当はもっと質問したかったけど・・・。じけられたのが困るから止めておこう。

「私が聞いた全ての事に嘘をつかないで。」

『！？』

「知ってるのよ、あなたの名前が“嘘つき”ってことくらい。」

『・・・・つ。』

「じゃあ一つ目の質問。この世界から出られる方法を知ってる？』

『・・・・し、知らない。』

「一つ目。あなたは何故私を迷路に閉じ込めたの？あの場所は何処

なの？？』

『ちょ、ちょつと待て、質問が増えてるじゃないかー。』

『いいから答えて！』

『・・・あの場所は僕が住んでる宮殿の地下だよ。無限の牢獄みたいな所。タキシード着たウサギに逢つたでしょ？あれは僕の召使だよ。』

・・・・・。

ライアがちょっとグレってきたかも。
口調が全く違う。

「もう一つに答えて無い。何故私のことを閉じ込めたの。」

『あ、れは……。』

しどのもどりに喋るなんてライア、ありしない。
やつぱり理由なんて無かったの？

「ちやんと最後まで言つてよ。」

『君をあの場所に閉じ込めておけば僕だけが君と話すことが出来た
からだよ。』

「・・・えつ？」

『君があのまま閉じ込められていたら殺されそうになる夢なんて見
なかつた！ずっと僕の前だけにいてくれればよかつたのに……な
に君はもとの世界に帰りたいって……』

「・・・つ。」

「・・・駄目だ、対抗できない。」

さつきまで私のことを蔑んだ顔で見ていたくせに……。

あれも全部嘘だつたって言つの……？

『・・・わうだ、君を連れて行きたい場所があるんだ。来てくれる

？』

「え・・・うん……。」

『そういうえばさつき足が冷たいって言つてたよね？これでも履いて
ればいいよ。』

そう言つてライアは私の足を白鳥の羽根で包む。

「あ、ありがと……。」

お礼を言つたその瞬間、ライアは驚くほど優しい笑みを浮かべた。

第六話「a repeat (クリカエシ)」

第六話「a repeat (クリカエシ)」

霧を抜けると、また今までと同じような森に出た。ただし、一つだけ違うのは、空に輝いていた月が無くなっていたことだ。

「月が……無い……？そんな、何で！？」

私が動搖しているのを見かねたのか、ライアは溜め息を一つついて言った。

『僕が連れて行きたい所は、月だよ。』
「え？・・・つ！？」

ザアツ！

瞬間、風が吹いてまた霧に包まれた。目をぎゅっと瞑る。

危うく飛ばされそうになるが、ライアが手を握つてくれたおかげで何とか留まることが出来た。

『・・・ほら、田を開けて、亜夜奈ちゃん。』
「・・・嘘でしょ・・・！」

田の前には今まで見ていた真っ青な月。

前に見たときは景色とは少し違つて私の足元はそこへ繋がる階段のふもととなっていた。

『ここは“真実の階段”と呼ばれていて、今までの嘘を全て晴らさないと登れないんだ。』

「じゃあ、ライア……。」

『そう、僕はここで全ての真実を君に話すよ。』

「真実……。」

『準備は良いよね？君は真実を知りたかったんでしょ？？』

「う、うん……。」

何でだろう……。

折角“嘘つき”であるライアが真実を教えてくれるって言つてるのに。

知りたくない。

そんな私に構わず彼は話し始めた

『君は迷路に行つた時、僕の召使であるウサギに僕のことを聞いたそうだね？』

「え……あ、うん。だつてまだあなたのこと知らなかつたから。」

『僕のことをどうして聞いてはいけなかつたのか、教えてあげるよ。』

『……。』

苦しそうな表情をした彼はゆっくりと口を開く。

『僕はね、この国の“月の宮殿”に住む

チャンドラ・マハル

んだ。』

「え……！？」

『僕の召使のような人々は、僕の存在を君の世界から来た人には教えてはいけない事になつているんだ。』

「……もし、教えてしまつたら？」

王子な

『さあ・・・・。それは僕にも分からぬ。ただ・・・』
「・・・・ただ?」

『随分前に教えてしまつた事があつたんだ。』

「それで、その人はどうなつたの・・・?」

彼は目を伏せ、いかにも言いにくそうに言葉を放つた。

『・・・・・殺されてしまつたそうだよ。』

「!」

昔 ライアの6代前が王子だった頃。
一人の召使がこの世界に迷い込んだ少女に王子の存在を教えてしまつた。
結果、少女は眞実に辿り着けなかつたのだが、大罪を犯したその召使は、王の命令で殺された。

“少女”は、何度も何度もこの世界にやつて来る。
でも大概は、“眞実”を垣間見ることは出来ない。

『・・・・分かるかい?この世界には、未だに解明されていないことが沢山あるんだ。』

「・・・・・。」

『一つは、“少女”は誰のことなの?』

ドクンッ

「・・・・つ!』

また心臓の音が響いてくる。

まるで 全ての眞実を拒否しているかのようだ。

『亜夜奈・・・ちゃん?』

ライアが心配して私の顔を覗き込む。

・・・ああ。

もうこの世界に来るのは飽きたのです。

早く、早く・・・。

どうか・・・真実を私に下さい。
でなければ私は。

また真実に辿り着けない

。

ふと、私の思考回路は別の人物のようになってしまった。

“あなたは・・・一体誰なの?”

第七話「the truth (シンジック)」

第七話「the truth (シンジック)」

思考回路は訴えた。

「真実を知るべきではない」、と。

本性は訴えた。

「真実を知らなければいけないんだ」、と。

『亜夜奈・・・ちゃん?』

“少女”は“真実”を求め続けた。
でも駄目だった。

寧ろ無駄でさえあった。

最期は必ず一択だったのだ。

その項目には“元の世界へ戻れる”は無かつた。

でも、もし“元の世界へ戻れる”という項目が発生したとして、辿り着けた時、“少女”は何を手にするのだろう?

幸福か・・・否、絶望であろう。

何故なら彼女は、“ ” だったから。

今、ライアを見つめる亜夜奈の眼は、虚ろで、冷たい。

まるで別人格が存在しているようだった。

もしかすると“ ” が存在しているからかもしれない。

「あなたは・・・一体“誰”なの?」

『・・・つー?』

ガツ！

覚めた目で亜夜奈がライアに攻撃する。ライアは先程までとは全く違う亜夜奈の表情によつてか動けずについた。

ふと、彼女は思い出す。

“少年”は、“少女”を待ち侘びていた。
「今度はどんな“少女”が来るのか」と、待ち侘びていた。
けれど、現れる“少女”が自分の性に合わないとなれば、“少年”
はすぐに“見物人”の座から降りる。
そうなると、必ずと言って良い程“少女”は誰かに殺されるかして・
・死ぬ。

・・・もう、分かり切つていた事じゃないか。
“私”が何者かという事も。
如何して“皆”に溶け込めなかつたのかという事も。
それが誰のせいなのかという事も。
全て。
すべて。

「・・・ねえ、教えて・・・?」

『亜夜奈ちゃん・』

「早く教えてくれなきゃ・・・また私が消えちゃうじゃない。」

『一体・・・どうしたんだ!?』

「早く・・・早く・・・時間が無い。」

そう、もう時間が無くなつてきててしまった。

次の“少女”が来てしまつ。

これは逃げられない現象。

ルルル

しかも“少年”が決めてしまった現象。

『どうこう…事だよー?』

・・・・・。

今回の御伽噺も駄目だつたかな。

今度は私がアナタを殺す事になつてしまひそつだよ。

・・・いいかもね。

殺されてばっかりだしね。

そうだ・・・、最期に聞きたい事があつたんだつた。

「ねえ、“クリア”は“翔耶”なんでしょう?」

『!?』

「“翔耶”は“クリア”なんでしょう?」

『なぜそれを・・・?』

「スカートをいじる癖が同じだつたもの。それに・・・顔も似ていたから。」

『そうか・・・。』

「もういいの?」

『ああ。僕が真実を教えなくとも、今の君は全て分かつているんだろ?』

「・・・ええ。だつて私がこの世界に来る最期の亜夜奈だから。」

『やつぱりね・・・。無限ループからやつと脱出できるつて訳か。』

『そうだよ。』

翔耶・・・いや、クリアが“少女”である“

繰り返す人

” = “亜夜

奈”に近づかなければの話だけれど。

そんな事を考えていたら、ライアが寂しそうな眼をして言つた。

『良かつたじゃないか。……もとの……世界に戻れるんだろう?』

『……どうかしたの?』

『僕は……』

冷ややかな目。

まるで全てを知っているとでも言いつぱつに向けられる。そして、やはり放たれた言葉。

「知ってるよ。」

ボーッ

不意に、汽笛が鳴った。

その音に敏感に反応したライアは力強く言った。

『あれに乗らなきゃいけない。』

『この階段は……?』

『大丈夫。もう使える。』

『そう……。』

『行こう、亜夜奈。』

知っているよ。

分かっているよ。

全ては貴方が招いた事だから。

今度はちゃんと結末に辿り着けるのかな。
そうだと良いな。

月の宮殿の王子と“繰り返す人”である亜夜奈は階段を駆け上がり始めた。

第八話「a mystery(シンピ)」

第八話「a mystery(シンピ)」

階段を上り切ると大きな船が現れた。
でもそれは。

「三日月・・・??」

クスッとライアが笑つてから言つ。

『さつき言つたでしょ。“僕が連れていきたい所は月だよ”って。』

「あ・・・そつか。」

『これは“神秘の船”って言つ名前なんだ。月が船なんておかしい
けどね。』

「これに乗るの?」

『うん。君が帰る前にこの国を見せたいんだ。』

「え、私でいいの・・・?」

『勿論だよ。』

そういえば今までの“亞夜奈”はここまで辿り着いた事が無い。
寧ろさつきの“真実の階段”なんても見た事が無かつた。

“亞夜奈”が繰り返してきた中で初めて見るものがこんなにあつた
なんて。

驚きが隠せない。

感情が揺らぐ。

その時。

ブワツ！

一瞬にして目の前が真っ暗になった。
嗚呼、またやつてしまつた。

今度はどんな・・

「え・・・・・？」

目の前にライアがいる。

嘘だ。

今までこんな事一度も無かつたのに。
私を蔑んだ目で見ていたのに。
私を突き落としたのに。
私を殺したのに！

ゴーン・・・ゴーン・・・

鐘の音が響く。

気が付けば足元は時計の中心になつていた。
ライアは針の先に立つていて私の周りをぐるぐる廻る。

嗚呼、如何して？

何故よ、亜夜奈。

貴女達はもう消えた筈なのに。

未だ私を苦しめる。

でも。

此れを乗り越えなければ“結末”には辿り着けない。

タツ！

覚悟を決めてライアのもとへ走り出す。
回る針のせいで足が縛れる。

ズルツ

「わ・・・つ！？」

『亜夜奈・・・！』

墮ちる

嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ
此処で墮ちたらまた全てが水の泡になる！
やつと此処まで辿り着いたのに！
もう墮ちるのは嫌だ！！

！

「・・・え？」

足元は、真っ暗闇。

何度も何度も墮ちた場所。
でも今私は墮ちていない。
何故なら。

ライアが私を助けてくれたから。

『・・・大丈夫？』
「如何して？」
『ん？』

「如何して私を助けたの？」

『・・・今度の君は、結末に辿り着かなきやいけないから。』

「そんなの何時決めたの？」

『ついさつき決め・・・！？』

「今まで・・・私を助けた事なんて・・・無かつたくせに・・・」

『亜夜・・・奈？』

涙が溢れる。

そういうえば涙を流した事が無かつた気がした。

・・・何故だろ？

ポタツ・・・ザアツ！

「ー？」

『この風はー？』

涙が地面に零れた途端、突然風が吹き

暗闇が、無くなつ

た。

私の涙によつて消されたのだ。

「嘘・・・こんな事・・・一度も無かつた・・・自分で暗闇を断ち
切るなんて事・・・。」

『神秘の船が助けてくれたのかな。』

「・・・どういう事？」

『昔から船の周りでは不思議な事が起きているんだ。だからこの船
の名前が“神秘の船”になつた。』

「そう・・・なんだ。」

『どうかした？』

「今まで・・・あの暗闇で私の事を突き落としてきたのは確かに貴
方なのに・・・まだ分からなくて・・・。」

『ああ、何で助けたのかって事?』

「うん。」

『さつき言つたはずだよ。“今度の君は、結末に辿り着かなきやいけないから”つて。』

『罪滅ぼしでもするつもりなの?』

『・・・そういう訳じや無い。他に理由があるんだ。』

「何?」

『“ライア”という人物は、君がやつて来る時必ず生まれ変わるものだ。』

「・・・!」

『僕はただ、今まで先祖がしてきた事があまりにも残酷だったから助けてあげたいと思つただけ。』

「じゃあ、如何して私を迷路に・・・。」

『“先代”から命令が下つたから。あの一人に逢わせるまでは全て今までと同じにしろと。』

『あの一人つて・・・クリアとシュヴェーアトの事?』

『・・・ああ。この世界のルールとして、“少女”は必ず一度は彼らに逢わなきやいけない事になつてているんだ。結末がどうであれね。』

『私はずっと・・・貴方が悪いんだと思つてた・・・。』

『良いんだよ。やつうのが普通だつたんだから。』

「でも・・・!」

『僕の先代達も、君に憎まれ続けてきたんだ。それに終止符を打てるのが僕だなんて思つても見なかつたけど・・・凄く・・・光栄な事だと思つてゐるよ。』

「・・・つ。」

“少年”は“少女”を待ち侘びていたけれど、ただ楽しかつた訳じやなかつた。

“少年”は生まれ変わり続けてきた。

“少女”がやつて来ると共に生まれ変わり、“少女”と共に朽ちる。
それがこの国での決まっていた現象だったのだ。

グイツ

『もうすぐ船が出港する。行くよ。』

「・・・うん。」

私の涙の後はすっかり消え、代わりに涙が落ちた地面に、一輪の花
が咲いていた。

第九話「a liar (ウソツキ)」

第九話「a liar (ウソツキ)」

“少年”は生まれ変わり続けた。

でもそれは必ず“少女”的であり、自分の為では無かつた。

“少年”はふと思つた。

“少女”によつて自分の運命が変わつてしまつてゐるのではないかと。

その為には“少女”を消さなければならないのではないかと。
だから“少年”は“嘘つき”になり、“少女”を騙し続けて来た。

しかし“少年”的望みが叶う事は無かつた。

その現象^{ルル}は永遠に続くものだつたから。

“少年”は段々とその現象に飽きてきた。
否、疲れたのだ。

“少女”的に何故自分までもが生まれ変わらなければならぬのか。

疑問さえ浮かんできた。

それでも“少女”はやつて来る。
抗えない現象。

“少年”は苦しかつた。

だから、“次で終わりにしよう”と決めた。
事の始まりは“自身の寂しさ”だつたと氣付かずに

。

出港の汽笛。

船に乗った時、ライアが溜め息をつきながら言った。

『・・・僕の先祖はきっと、独りだったのが寂しかったんだと思つよ。』

『だからって・・・作れば良い話じゃないの?』

『“友達”を?』

ドクンッ

心臓が大きく鳴る。

何でこんなに苦しいんだろう。

何でこんなにこの言葉が嫌いなんだろう。

嗚呼、そうか。

“お友達にならうよ。”

“少年”のせい・・・だったのか。

「・・・ねえ、ライア。」

『何?』

『貴方の先祖は如何やら私にトラウマを残していったみたいよ。』

『・・・どういう事?』

真剣な眼差し。

その眼差しからは本当に私の事を心配してくれている事が分かる。

“私”は、“貴方”に逢うと必ず最初に必ず“お友達にならう”

つて言われたの。』

『！』

「何か心当たりがあるの？」

『・・・僕、言つて無いつけ。』

「そうだけど・・・？」

私が見ても分かる程の戸惑いの表情。

ライアが妙に淡々とした口調で言つた。

『僕の・・・僕のせいで結末が変わつてしまつかもしれない。』

「え？」

『もしくは、僕のせいで結末が変わつてしまつたかもしれない。』

「意味が分からんだけど・・・？」

疑問を投げかける私を無視する様にライアは話を続ける。先程とは裏腹に真剣な表情に変わつた。

『ねえ、君はもしあの世界から帰れなかつた場合・・・どうするの？』

『え、えーっと・・・わ・・・分からん。』

『そう・・・。』

『どうしたの？さつきから何か変。』

『そんな事、無い。』

『嘘でしょ・・・？』

『・・・つ。』

暫しの沈黙。

貴方は如何して、全ての事を自分の中だけに仕舞つて置くの？

貴方は如何して、其の事を私に教えてくれないの？
貴方は如何して……。

前にも此の台詞を聞いた事が或る気がする。

・・・嗚呼。

また私は還れないのだろうか。
また・・・か。

沈黙が破られた。

ライアが口を開いたからだ。
しかし口調はさつきとは打つて変わつて緊張氣味。
そして、紡がれた言葉。

『・・・君の事を信じても・・・良い？』
「な・・・つ！？」

突然の台詞に驚く。

まさかこんな事を言うなんて思いもしなかつた。
と、私が呆気に取られているのにも気付かず、追い打ちをかけるよ
うに話を続ける。

『駄目、かな・・・。』

「そ、そんな事は無いけど・・・。」

『僕は多分・・・大罪を犯した。』

「え・・・？」

『・・・言つたでしょ？“あの一人に逢わせるまでは全て今までと
同じにしろ”と命令が下つたと。でも僕はそれを守れなかつた。』

「じゃあ、貴方は如何なるの・・・？」

『消されるんじや・・・ないかな。』

「そんな・・・・・」

『でも違つかもしれないよ。』

ライアは何時もよりも増して優しい瞳をして言ひ。

・・・止めてよ。

止めてよ、その眼。

貴方が消えるなんて私は嫌だよ。

こんな事言つて良いのか分からぬけど、

貴方には消えて欲しくないよ。

第九話「a liar (ウソツキ)」（後書き）

次回、最終回の予定です。

第十話「an end (ケツマツ)」

第十話「an end (ケツマツ)」

“少女”＝亜夜奈は永遠に続くループに疲れ、そして人を信じられなくなっていた。

それでも抗えないループの中を廻り続けた。

彼女は苦しかった。

しかし、それは段々と“真実の結末”に辿り着ける事を暗示していたのだ。

だが、それでも彼女の前には最後の難関が待ち受けていた。

“元の世界に還れないかも知れない”

彼女にとつては何時もの事だったが、今回は違う。

“少年”＝ライアが“最期”と決めたから。

彼女はこれで永遠のループを脱出できる。

はずだった。

彼は重大なミスを犯していたのだ。

“クリアとシユヴェアトに逢うまでは台詞動作全てを同じにする”

これが彼に与えたれたルールだった。

彼は昔からこのルールに従つて生きていた。

しかし、今回の彼は亜夜奈に最大の苦しみを与える台詞を忘れていた。

「お友達になろうよ」といづ、台詞を。

ルールを守れなかつた彼は罰せられる。
罰せられるとはつまり、消される事。

今までにも罰せられた事はあつた。

が、今回だけは嫌だつた。

何故なら、亜夜奈が還るのを見送りたかつたから

「・・・それで？消えちゃうとしたら・・・何時なの？」
『君が還つてから・・・だと、良いな。』
「分からぬの！？」
『・・・うん。僕にはそれを決める権限は無いから。』

そう言つてライアは寂しそうに笑つ。

嗚呼。

私は彼を苦しめる事しか出来ないのでしょうか。
私が彼を救う事は無謀なのでしょうか。
私は彼を救いたいと願つてはいけないのでしょうか
。

“変わらないものなど無い”

ふと、声が聞こえた。
しかし船の上なので周りにはライア以外の人の気配など無い。
でも、確かに聞えたのだ。
・・・もしかしたら。

スッ

「貴方か・・・。
『・・・神秘の船が如何かしたの？亜夜奈。』

「この船が今教えてくれたの。」

『え?』

“変わらないものなど無い”って、私に教えてくれた。」

『それってどうこう……。』

「だから、いくら今回で物語を終わらせようとしても、また新たな物語が生まれるって事だよ。」

『そんな馬鹿な……。』

「嘘じや無い。ちゃんとこの船が教えてくれたもの。」

『いくら神秘の船であつても、そんな事はあり得ないー。』

「ライア。」

『・・・・・。』

いつになく真剣な表情。

ライアは言葉を失つ。

「私はこの世界でもう最後なんだつて決めつけてた……でも違つたんだよ。」

『・・・・・。』

「また繰り返さなくちゃならなくなる。それは貴方も同じ。」

『亜夜奈・・・。』

「何?」

『それは……“また逢える”って事……なのかな。』

「……分からない。でも、可能性は高いと思つ。」

『そつか・・・。』

彼はホッとしたのか、笑顔になる。

それを横田で見ながら、亜夜奈は言つた。

「ライア。私が還れる所まであと少しだよ。」

『そう……だね。』

「私、ライアには消えて欲しく無い。」

『え?』

「ライアがいなくなるのは嫌だ・・・。」

『何言って・・・!?』

亜夜奈の頬に温かい雫が零れる。

一度目の涙。

彼女はライアが消えるのが嫌だった。

それを止める事が出来ない自分も嫌だった。

最初は彼に対して憎しみを抱いた。

しかし真実を求めるにつれて彼の優しさを知った。

感謝の涙が溢れる。

止めようと思えば思つぱど止まらなくなる。

「つ・・・有難う。」

『・・・。』

「それと・・・ごめんね?」

・・・苦しい。

彼女にこんな思いをさせるつもつは無かつたの!。

嗚呼、もうすぐ彼女は還ってしまう。

そしてまた、新しいループへと変わつて行く。

消えると分かつた時、どれほど絶望しただろう。

「消えて欲しく無い」と言われた時、どれほど救われただろう、嬉しかつただろう。

僕は、
僕は、

“貴女を守りたかつただけなんだ。”

目の前が光り出す。

そうか、もう還れるのか。

良かつたね、亜夜奈。

『さよなら。』

二人は眩い光に包まれ、この不思議な世界から消えた。

「・・・あれ？」

目覚めると、そこは学校の屋上。
そつか・・・還つて来れたのか。

夢・・・だつたのかな？・・・つうん、きっと違う。

確かにあの“世界”は存在した。

出逢つた人も、物も、全部そこにあつた。

・・・ああそうだ、また次の準備をしなくちゃね。

タツタツタツタツ・・・

彼女の還つた世界には“安藤翔耶”的姿は無かつた。

しかし、彼女が屋上を出て行く姿を、蒼い目をした真っ白な猫が優しい瞳をして見送つていた。

第十話「an end (ケツマツ)」（後書き）

次回本当の最終話、ヒローグです。

Hピローグ「a boy(ショウネン)」

“少年”は猫になりました。

何故なら“少女”が「消えて欲しく無い」と願つたから。

“少年”は優しくなりました。

何故なら“少女”が可哀相だつたから。

“少年”は悲劇を止めました。

何故なら“少女”が大好きだつたから。

“少年”は 僕を嫌いました。

僕を憎みました。

僕を殺しました。

何故なら“少女”が“少年”に怯えていたから。

素敵な結末だと思った?

僕がこんなにも苦しいのに?

無理な結末だと思った?

僕が手を出していないのに?

真実に辿り着けたと思った?

まだ話は終わっていないのに?

楽しく無い、楽しく無い。

そうだね、僕はただの spectator 『観覧者』。
でも最後に一つだけ聞いてね？

僕はね、初代の“少年”だよ。

この世界の“創始者”だよ・・・?

僕は仲間が欲しかったんだ。

僕はお友達が欲しかったんだ。

だけどね、僕だけは何時まで経っても、

“ひとり”。

Words by spectator.

ハローケ「 a boy(ショウガネン) 」（後書き）

「 愛読有難うございました。 」

次回作に期待下さい・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133o/>

ひとり。

2011年2月27日12時33分発行